

## 芳賀和恵氏による懇話

5月9日、ゲルマニア会世話人/有志の会が開かれました。

『ゲルマニア』第18号の発送作業が有志の方々の大活躍で恙なく終了した後、引き続いて世話人/有志の会となり、懇話会では芳賀和恵様から興味深い話を伺うことができました。

芳賀さんは母校ドイツ語科を平成一年に卒業後、キヤノン（日本とドイツ・ギーゼンでの）勤務を経て、再び大学で学び、博士号まで取られた方です。それもドイツで、経済学の博士号を取られたのです！ 彼女の700ページを優に超える大部の学位論文・『高齢化社会におけるイノベーション・発展進化のダイナミクス』/“**Innovations und Evolutionsdynamik in demographisch alternden Gesellschaften**”をちらっと拝見し、今日は理解不能の話に眠気をこらえることになるかな、と覚悟しつつも、楽しみに懇話が始まるのを待ちました。というのは、芳賀さんは、もう十数年も前のことになりますが、シュタインベルグ先生の課外ドイツ語ゼミで、随分長くご一緒したゼミ仲間の雄だったからです。芳賀さんは、キヤノン・ギーゼンでの仕事を通して、ドイツの所得税等の税制度に興味をもつようになり、帰国後 まずは慶応義塾大学の通信制で経済学を学び始めました。その後、ドイツの大学での日本の学位（学士）の評価の低さに愕然とします。それではドイツで通用する学位を取ろうと、学費のことも勘案して、日本ではなくドイツの大学に一般学生として2001年入学します。これが芳賀さんの11年余に及ぶ奮闘の始まりでした。

芳賀さんが入学されたのはヘッセン州のマールブルク大学。石畳に面して並ぶ古い木組みの家々、山城、そしてグリム兄弟も学んだことで知られる美しい町マールブルクにある、プロテスタント系としてはドイツ最古の大学です。

**Grundstudium**(基礎過程)では、要求される勉強量の多さもさることながら、それまでの人生では考えたこともなかった追試等々の勉強の厳しさを経験し、それまでの旅行者、留学生、日系企業で働く日本人としては経験したことのなかった対人関係の緊張をも強いられることになりました。が、そこは勤勉で緻密な頑張り屋の芳賀さんのこと、無事に **Vordiplom**(中間試験)を取り **Hauptstudium**(専門課程)に入ります。その時には入学時300人余もいて大教室に溢れかえっていた同期の学生が半分ほどにそぎ落とされていました。2006年に修士号を取り、2007年から博士論文を書き始め前述のような大作を仕上げ、2012年博士号を授与されます。

今回芳賀さんは、この傍目には華々しくも羨ましいドイツでの学生生活の内側を、人間関係を中心に、具体的にユーモアたっぷりに話してくださいました。共に学んだ学生たちとの人間関係も、指導教授とのそれも、決してそう甘いも

のではなかったようですが 理解し協力し合える相手を選び、人間的な相性を大切に粘り強く目的のために頑張ってきた様子を伺い、眠気などもちろん感じる暇はありませんでした。

芳賀さんのお話が一段落した後、何人かの方々が芳賀さんの研究内容に関する質問をされました。それぞれの質問に丁寧に答えておられましたが、その時の表情は懇話の時のにこやかさとは違って、すっかり研究者の表情になっていました。また別の機会に『高齢化社会におけるイノベーション・発展進化のダイナミクス』についても少し伺ってみたくなりました。

帰国されて 2013 年 5 月から、ドイツ連邦政府による日本研究機関である、DIJ - ドイツ日本研究所の専任研究員としてご活躍ですが、更なるステップアップへの意欲も満々のように見受けられました。ご活躍をお祈りいたします。

(大松陽子 D1972 記)